

。今年より外部卓話者に「ロータリーの友」をプレゼント 雑誌委員会

ニコニコボックス：	15日現在累計	165,000円
-----------	---------	----------

江口 悟 君 13日に無事、前社長の四十九日の法要を終える事ができました。皆様には密葬及び社葬と大変お世話になりました。

米山 忠 俊 君 本年度のお客様の卓話第一号の森脇様、御多用の中ありがとうございました。外山さんいろいろ有難うございました。

吉川 吉 彦 君 江口さんお久しぶりです。森脇慶二先生ようこそいらっしゃいました。本日の卓話楽しみです

本間建雄美君 森脇様、卓話「軽きものの儀」宜しくお願い致します。

佐藤 啓 策 君 森脇慶二さん、卓話を引き受けて下さりありがとうございます。楽しく拝聴させて頂きます。

堀川 正 幸 君 久しぶりに江口さんのお顔が見れて嬉しいので、

大野 新 吉 君 先週金曜日の柴田長俊画伯の講演会に会員より友情出演して致き誠に有難うございました。当日、急用が出来まして皆様方にご挨拶も出来ず大変失礼致しました。ここにあらためてお礼申し上げます。又都合悪く欠席の会員さんからもわざわざFAX戴きまして有難うございました。合掌。

今井 克 義 君 子供の頃、チャンバラ映画を観たあと、自分が主人公になったような気分で映画館からでた事を覚えていますか。ヨネックスオープンで逆転優勝した尾崎直道選手について回りました。久しぶりに子供の頃の興奮を覚え帰ってすぐに練習場へ直行。しかし……たった一打で夢はさめました。ア～ア。

落合 益 夫 君 職業分類・ロータリー情報・会員選考・会員増強の合同委員会は7月18日の夜7時です。皆さんよろしく願います。

淵 岡 茂 君 はじめての親睦委員です。席札をおくばりしています。今後共宜しく願います。尚、お帰りの際はテーブルへおいてお帰り下さい

久 保 博 君

佐藤 文 夫 君 ボックスに協力、

小 林 満 君 久しぶりでした。ボックスに協力します

卓 話： 「軽きものの儀」(株)鐵 販 代表取締役 森脇慶二様

軽き者。本日は赤穂47士ただ1人の生き残り、軽き身分である足軽寺坂吉右衛門信行について述べることにする。

赤穂義士と越後といえば、誰もが先ず思い浮べるのが新発田出身の堀部安兵衛武庸であろう。だがあまり知られてはいないが、寺坂吉右衛門も越後、いや我々が三条に縁があるといえるであろう



う。というのは、三条は慶安2年（1649年）以来村上藩の所領になっていたことである。宝永元年（1704年）姫路から本多忠孝が、村上薄主として移って来た時、その家臣の中に寺坂吉右衛門がいたのである。これについては後で述べる。

徳川家康が征夷大將軍に任ぜられ江戸に幕府が開かれたのが慶長8年、西暦1603年のことである。そして文化の花が開き人々が泰平の世を謳歌していた元禄が17年3月、宝永と年号を改めたのが西暦1704年、丁度百年を終えて続く百年への最初の年ということになる。

その泰平の世に大きな衝撃を与え、以来芝居に映画、テレビ、それに浪曲や講談、歌など、日本人に最もよく知られた赤穂浪士による吉良邸討ち入りの事件は、元禄15年12月14日寅の上刻に決行された。寅の刻とは今では午前3時から5時ということになり、その上刻ですから3時から4時の間になる。ここで日付が14日というのは現在の時間では間違いです。現在では午前0時をもって日付が変更されますが、当時は夜明け、即ち明け六ツをもって日付が変わっていたのである。従って15日と言っているのは当時の日付では間違いである。また赤穂義士たちにとって主君の無念を晴らすその日は、吉良邸に於いて茶会が開かれるなど、諸条件が討ち入るのに整っていたのは確かではあるが、14日ならば最も劇的ということになる。何故なら、義士たちにとって主君浅野内匠頭が、江戸城松の廊下で吉良上野介に刃傷に及び、即日愛宕下の田村右京太夫邸の庭先で切腹させられ、事件の発端となった日が元禄14年3月14日であること、言い換えれば月こそ違え命日なのである。

そこで本題に入ることにする。寺坂吉右衛門は何故切腹を免れて83歳迄の天命を全うしたのか。この問題は事件発生後間もなくの頃からいろいろ取り沙汰されているが、大きく分けて2つある。1つは討ち入り寸前に逃亡した。もう1つは討ち入りには参加したが、泉岳寺へ引き上げるまでに仲間から外れた。前者を強く主張する者に、義士を切腹へと幕府が判定を下すに大きな影響を与えた、時の大学者荻生徂徠の高弟である太宰春台をはじめとして、明治の徳富蘇峰もまたその一人であるが、数多くの人々がいる。後者にも八代將軍吉宗お抱えの大学者室鳩巢をはじめとして、義士研究家の伊藤武雄など前者を凌ぐばかりである。ただこれら何れの論を取り上げても、あるものは正面から、あるものはその根底に共通して流れているものは「軽きものの儀」ということではなからうか。この言葉は義士の一人で吉右衛門が仕えていた主の吉田忠左衛門が大目付仙石伯耆守に対し、「私組之者一人、上野介様御前より駈落仕候」と述べたところ、「軽き者之儀、御構無之」と答えたことに象徴されていると思う。

私は赤坂吉右衛門が義士の一人であることを信ずる者である。

足軽寺坂吉右衛門は軽きものの故をもって、義士にあらずとする46士説の人々からは、概ね「臆病風に襲われて、一命が惜しいばかりに逃亡した」ときめつけられたのである。また義士と信ずる47士説の人々には、大石内蔵助の計らいで広島浅野本家や各地にいる縁の者のところへ、討ち入り